

令和7年度「地域づくり表彰」 審査後の総評

昭和59年度に始まり「地域づくり」に対する表彰制度としては最も古い部類に入る本表彰だが、第42回にあたる今年は、東京一極集中の是正や地方創生に資する「二地域居住促進法」の施行からの初の実施であった。

そのため、本年度より共催者に「全国二地域居住等促進官民連携プラットフォーム」が加わり、新たに二地域のプラットフォーム賞が新設された。

本年度も、全国各地より、数多くの個性豊かな事例を推薦いただき、本資料にあるとおり、「国土交通大臣賞」をはじめとした全10事例について各賞を決定したものである。今年の審査の総評は下記のとおり。

- これまでも「関係人口」という言葉は数多く使われてきているが、今年の事例では、活動への参加者が「関係人口」のまま留まるのではなく、地域が直面している課題の解決や夢の実現に共創していく仲間となる取組が見られた。「関係人口」が街や地域をつくりかえる主人公にもなりうる実例を見せていただいた思いである。
- 「二地域居住」については、それをゴール・目的とするのではなく、それを外の人と地域の人との共創の「手段」として捉え、いかに新たな活動やビジネスの立ち上げにつなげていくかという、「二地域居住」を「どう生かすか」という観点で、地域づくりにおいて大切なことが確認できた。
- 印象に残ったのは、鉄道と現代アートなど、地域の平時の生活とはかなり距離がある、エッジの効いたテーマが、独自のストーリーを生み出し、次第に地域の方々の共感や参加を得て、「地域づくり」の重要な要素へと進化していく実態モデルも提示いただいたようであり、昨年度の、「スポーツによる地域おこし」に引き続き、「趣味」や「推しへの情熱」とか「アート」などが地域に新たな新風を吹き込み、地域づくりの足がかりになったということは、大変興味深い。自分たちが素晴らしいと信じている地域価値や資源に、諦めずに光を当て続け可視化していたこと、外の人々に地域価値に触れていただく機会を丹念に積み重ねたこと、また、地域資源への光の当て方の工夫によって思わぬ大きな効果を生むことも分かった。
- 今年の優良事例は、内容の質の違いこそあれ、地域が衰退してきているという深刻な危機感を元に、足元の、身近な、あるいはコアなグループ活動をスタート点として、何とかしたいという思いと、自分たちの小さな楽しみがある取組を1つ1つ積み重ね、次第に外の人々やステイクホルダーを巻き込んだ結果、それが大きなうねりとして広がり流れを形成できた取組が少なくなかったように思う。
- 事例の場地的特性に着目すると、今年は都市近郊地域の地場の皆さんの危機感の強さに改めて驚かされた。市単位では全国的に見ても恵まれている市でも、中の地区単位で見ると、地域産業の衰退、交通の利便低下、地域アイデンティティの喪失懸念、そしてむしろDID、CBD等に近いが故に明暗がより際立ち、地場の方々の地域の持続可能性への危機感が強く示されていたことが印象的だった。
- 今年は、「地域づくり」を背後から支える主体やしくみの存在の大切さについても考えさせられた。従来型のメセナやCSRから、CSV＝地域づくりや地域課題等の解決と企業目的とを「相乗的」に高め合う取組＝が新鮮に感じられたし、更なる広がりを期待したいところである。また地域課題の解決法を得るだけでなく、中間支援組織が、解決の担い手探しや実装を支えていくという構造にも大いに感心させられた。
- 「地域づくり」の歴史は、この表彰だけでも半世紀近い長さを持つ訳だが、過去の事例を改めて振り返ると、常に「持続可能性をどう確保していくか」という問いとの戦いであったとも感じる。「持続」には、「若い人」「地域外の人」の参加・参画が不可欠で、そのために新しい共創・協働の場づくりこそが前提となるのだろう。そして、今年の事例を見て、「若い人」「地域外の人」の参加・参画を得る手段として、改めて「関係人口」「二地域居住」という枠組みの有効性や新たな可能性を感じたし、幅広い参加者と関係性の深化のしくみとして、様々な趣味集団・民間企業との連携や、受入地域側の工夫としての「地域ラボ」等の交流の枠組みやマッチングの仕組みが有効に働いていたと感じられた。
- 最優秀賞に当たる今年の大臣賞については、このような背景を踏まえた「持続可能性の高さ」が特に評価されたものである。そしてこれらの事例から「持続可能性」は「関係性の広がり」と深く関わることもよく分かった。では、「関係の広がり」は何が左右しているのかを考えると、やはり「共感」と「意識の変化」であろう。皆がそれぞれの思いでガムシャラにやり続けていたら、自然発生的に大きな輪やうねりが生じ、うまく回ったということかもしれない。そこから読み取れるのは、それぞれの内なる声や情熱にしたがって「はじめの一步」を踏み出しそれを継続することを通じ、新しい仲間や支援の手が増えていったということだろう。今後への示唆として、小さな事でも・少ない仲間でも「最初の一步を踏み出してみる」こと、そして、外の人々との交流地道に紡いでいくこと、そのなかで独自のストーリーに裏付けられた価値を作り出すことが幸運のチャンスを引き寄せることにつながるのではないかと考える。